



SEIYUSHA

昭和三十八年七月十日 印刷
昭和三十八年七月十五日 発行

定価 二八〇円

著 者 北 村 鱒 夫

発行人 土 井 勇

印刷人 山 森 忠 一

発行所 青 樹 社

有限
会社

東京都千代田区
神田神保町二ノ一八
電話(301)〇五四五番
振替東京四七六四八

― 落丁・乱丁本はお取替之致します ―

長編推理小説

死者との契約

北村 鱒 夫



SEIJYUSHA



死者との契約

装
幀

中
島
靖
侃

街は暮れなずんでいた。

灰色にかげつた空には早くもネオンが点滅して、歓楽のときに入つたのを告げていた。レストランはかくわしい匂いを充満させて明るく輝き、酒場は秘密っぽく黒い扉を閉ざして無言の誘いを送りつけている。

だが、夜の装いをこらした谷間を流れるおびただしい人の群れは、殆ど傍眼もふらずに神田駅をめざしていた。まるで巣に戻るのを許された蟻みたいに足どりはずませているのだ。大抵が家庭に忠実な夫や身持ちのいい娘たちのようであつた。

地下鉄から地上に出てきた仲木健次は、眉をしかめてハイライトの煙を吐きだした。まずい時間であつた。勤めから解放されて家路をたどる群衆のなかには、幾人かの神田美術印刷の社員がまじつてゐる筈だ。仲木は八カ月前までの同僚たちと顔を合わせたくなかつたし、ましてや川岸美保子と密談しているところを見咎められたくはなかつた。

仲木は売店で夕刊スポーツを求めると、紙面に顔を埋めるようにして、人の流れを逆行しはじめた。夕刊にはプロレスの試合経過が誇大な表現でつづられていたが、仲木の視線は行きかう男女たちの方へ注意深く向けられていた。若し誰かに声をかけられたら、仲木は美保子と逢うのを

諦めねばならなかつたからだ。神田美術の連中の眼に二人の關係を嗅ぎつかれる危険は、どうしても避けなければならぬのだ。

幸い、仲木は神田美術にいたあいだ、工務部長の秘書をしている川岸美保子とは、異性の同僚として浅い交際をしていただけであつた。というより、美保子が部長の二号的存在なのが公然の秘密だつたから、なるべく敬遠していたといつていい。仲木の記憶にも、仕事の連絡以外に交わした言葉がひとつも残っていない。

しかも、美保子は典型的な模範社員タイプで、仲木の眼には味気ない娘のように映つていたのだ。中学を卒業して以来八年のあいだ無遅刻無欠勤をつづけて、年度末ごとに社長から表彰されている女なんぞに、興味の抱けよう筈はなかつた。部長との噂が信じられぬほど、職場での美保子は地道に仕事に打ちこんでおり、休憩時間中にも美保子が嬌声をひびかせたのを仲木は聞いたことがない。隠花植物のような女だというのが、当時仲木が受けた美保子の印象のすべてであつた。

だから、退社していつた仲木が美保子と深い關係を結んでいようとは、神田美術の誰もが想像さえしていないに違ひなかつた。そして同じ事情から、いつた二人のあいだの秘密を嗅ぎとられたならば、忽ち猜疑の眼が集中して一切が露見するおそれがあつたのだ。

誰かに行きあうのではないかという杞憂ははずれて、約束の場所にいきつくまで、仲木は見知

つた顔にひとつも出くわさなかつた。

仲木はひそかに安堵の吐息をもらしながら、BAR・SUMIREと書かれた朱色の扉を押しひらいた。

川岸美保子はすでにきていて、カウンターの隅でブランデーをなめながら、若いバーテンと潤んだ声ではしゃいでいた。新調したてのベージュ色のタウンスーツにしなやかな肢体をつつみ、襟もとから紫の水玉がプリントされた綾絹のブラウスをのぞかせ、濡れた唇を光らせながら笑っている姿は、不意に花を咲かせた隠花植物の妖しさがあつた。

「待ちきれなくて、ひとりではじめたの」

美保子はバーテンにむけていた媚びを含んだ視線を、そのまま仲木にむけて甘えるようにいつた。すでに臉のあたりを染めていて、平凡な顔だちであるだけに、いつそう嬌態が露わに感じられる。

「ここで待ち合わせるなんて、随分思いきつたことをするじゃないか。誰かに見られやしないかと冷汗ものだったよ」

「大丈夫よ。神田美術には頭の切れるのはいないから、安心してのさばつていいのよ。ちつちやな自分を守ることだけに汲々としていて、会社のことや他人の行為にまで眼をふりむける余裕のある男なんぞいやしない。たまに骨がありそうな男だなと思つたら、二、三年も勤めないうち

に、さつさと辞めていつてしまおうわ」

「皮肉をいわれてるみたいだな」

「ノー、ノー、これでも精いっぱいのお世辞のつもりよ。会社にいるあいだに得意先に取り入つて、独立と同時にそれを奪つていくなんて、普通じゃできない芸当よ。惚れ惚れとまではいかなけれど、美保子があんたに可成りの魅力を感じているのは事実だわ」

「光栄だね」

仲木は二つあるボックスの奥の方に腰を落すと、ハイボールを頼んでから、美保子とまり木をおりて近づいてくるのを待った。酔うと露悪的な饒舌をふるう美保子の癖を知っていたからだ。まだ夜になりきらぬというのに、パーテンの目前で奇矯な振舞いに出られてはかなわない。

仲木が美保子の仮面をはいだ姿をはじめて見たのは、二カ月ばかり前である。

その夜、仲木がふらりと入ったコマ劇場裏のバーで、偶然ブランデーに酔いしれている美保子の姿を目撃したのだ。すでに客時をすぎた刻限で、閑散とした店内に客は美保子だけであつた。ダークグリーンのオーバーをしどけなく羽織り、グラスを両の掌であたためながら、パーテン相手に潤んだ声で笑いつづけている美保子の姿態は、仲木が突曉に信じられなかつたほどの別人のものであつた。美保子の肢体には夜の蝶に見られぬ妖しい懨懨がにじみ出ていて、仲木を二重に当惑させもした。それは火のまわりで舞つている蛾にも似て、癡顔を自ら意志した奇妙な健気さ

を匂わせていたのだ。

仲木をさらに驚かせたのは、仲木に自堕落な情景を見られたと知つても、美保子は毛ほども狼狽のいろを現わさず、やがて『いい浮気の相手がやつてきたから今夜はこれで失礼するわ』とパーテンたちに媚婦よりも臆面なくいいおいて、仲木の腕に淫らな手をからませてきたのである。

仲木は異様な衝撃にしぶれたまま、その夜美保子とともにすごしたが、翌る朝になると、もうひとつのシヨツクが仲木を待っていた。白みはじめたカーテンに気づいて、再度の愛撫の手をさしのべると、美保子は仲木の眼のうちを冷やかに覗きこんで『会社に遅れるじやないの』と早々と身仕度をしてホテルを出てしまったのだ。ベッドを転々として身悶えたのとは別人のようなべのなさであつた。

以来、仲木は幾回か美保子とのときを持つたけれど、朝の光を眼にとめると、美保子はいつも模範社員の顔を取り戻していたのである。

しかし最初の夜のうちに二人のあいだで交わした契約には、美保子はあくまでも忠実であつた。

神田美術印刷が得意先からの受注にさいして見積る製作費の明細は、正確に仲木のスタジオに通報されていたし、新たな商談が持ちこまれたニュースはいち早く仲木の耳に届けられていた。

美保子は会社の利益を裏切ることをスポーツのように楽しんでゐる風で、スパイの役を背負わされてゐる暗さが少しもなかつた。

報酬として仲木から月々二万円を渡されるときにも、美保子はいたずらつ子のようにちろつと舌を出すだけなのであつた。

「今夜は駄目なのよ」

美保子は仲木のむかひに身体を投げだすようにして沈みながらいつた。

「まだ最終的な見積り価格が決まらないらしいのよ。それに入札の前に見積り額が横流れしてゐるのに薄々気づきはじめてるらしいわ。国際見本市関係の仕事を殆ど取り損なつたんでしょ。それで幹部連は頭にきてるのよ」

「それなら会社の近くで二人が逢うのは、いよいよ危険じゃないか。夕方スタジオに戻つて、君からの伝言を見たときから、ヤバイ橋を渡るんだなと驚ろいていたんだ」

「その点は平気よ。私だつて伊達に模範社員の演技を長年つづけてきたわけじゃないわ。八年ものあいだの実績は、そうやすやすと崩れないわよ。目下のところ、疑いの眼で見られてゐるのは営業の連中よ。色んな印刷所を渡り歩いて、業界の裏道に通じた海千山千が多いからね。請求書を水増ししてポケットに入れたり、リベートに持つていく筈のキヤツシュを先方に届けなかつたり、悪どいのが何人もゐるものね」

「しかし……」

「用心には用心をといいたいんでしょ。抜かりないわよ。品川に家のある私が夜の新宿をふらついていたら、怪しまれるかもしれないけれど、神田で見られても、別に不思議がられるいわれはないでしょ。なまじ小細工しない方が利口じやないかしら。いつそ水車で逢おうかと考えていた位よ」

「馬鹿な」

仲木は苦い顔になった。

水車は神田美術印刷の連中がたまり場になっている水道橋駅の近くの小さなバーである。仲木も同僚とともに毎夜のように通い、マダムやホステスたちともうちとけて、いわば身内同士のような親しみを感じあっていた。仲木が独立するときまつたとき『桜橋へいつてしまつても、銀座が近くなつたからといつて、水道橋を忘れちや駄目よ』とマダムは耳打ちするのを忘れなかつたほどだ。

しかし、後日水車を訪れた仲木は、すでに自分が歓迎されざる客になつてゐるのを思い知らされた。仲木は背徳漢であり、早晚自滅するだろうと、やつかみ半分に元と同僚たちが取沙汰しているのを、マダムは事実のように信じたらしいのだ。仲木が独立する計画を最初に打ち明けたのが他ならぬ同じマダムであつただけに、仲木の屈辱は大きかつたのだ。

「今度からは品川で逢うようにしよう」

「それもいいけど、家に近すぎると、浮氣したいときに気分がそがれるんじゃないかしらねえ。ホテルを出たときに、近所の顔見知りに出合つたりしたら、わびしすぎやしないこと……」

美保子は淫らに頬を崩して、意味ありげにまばたいた。いつか美保子の脚が仲木の足にからんできていた。

「明日は大丈夫だろうね」

「大同電機のカタログの見積りでしょ。大丈夫よ。どんと委しといてよ」

美保子是不機嫌な声でいい、じれつたそうに仲木をにらんだ。すでに情欲をたかぶらせているらしく、美保子の眼は焦点を失なつたように宙に揺れていた。

「今夜は都合が悪いんだ」

「誰かと約束でもしたというの。そんなのつてないわ。そのひとつで、とてもいいの。私だつて負けない位に上手にできてよ」

「違うんだ。ぼくがこれから逢わなきゃならないのは野郎だよ。それも別々の場所に二人待たせてある。十二時すぎないと、自由な身体になれないんだ。なんなら、その頃にぼくのアパートにきてくれてもいい」

美保子は鼻先で低く笑つた。

「どうだか、怪しいものだわ。誰かとお寝んねしてきたあんたを抱くために、練馬くんたりまでいく気はしないわよ。私を持つていき場のない気持ちにさせといて、あんたも随分ひどいのね」

「ぼくも残念だけど、今夜だけは勘弁してほしいんだ」

「いいわよ、適当に浮気の相手を物色するから。今夜あたりは河岸を代えて浅草の方へいつてみようかな」

美保子はブランデーを一気に飲みほすと、怨みがましそうに仲木を見た。

「先に失礼する」

仲木が立ちあがると、美保子は点けたばかりの煙草をあわてて揉み消して、

「一緒に行く」

と、甘えた口調でいうなり、仲木の袖にすがりついた。酔いに足もとが定まらぬのか、仲木の右腕はずつしりと重かった。

バーテンの好奇心な眼に送られてすみれを出ると、外はすっかり夜になつていた。酔いに声をはずませた黒い人影が頻りに右往左往している。

仲木は美保子を引きずるようにして暫く歩いた。仲木の胸や腰にからみつく美保子の肢体は、幾度か素肌で確かめたしなやかさをまざまざと思い出させ、そのままホテルへ直行したい衝動を屢々感じさせた。

広い通りへ出ると、折よく空車が徐行してきて二人の前に停った。

「じゃ、また」

仲木は軽く美保子を突きはなすと、坐席に滑りこむなりドアを閉めた。額を傷つけられたように表情を歪めて佇ずむ美保子を二度と見かえることなく、仲木は無表情な声で「西銀座」と運転手に行先を告げた。

2

仲木健次が三年近く勤めた神田美術印刷を辞めて、桜橋の寿ビルの一室に創美スタジオを設けたのは八カ月前である。

三年のあいだ工務課員として始終出入りしていた幾つかの得意先を説得して、その印刷物の一切を仲木が引き受けることで独立を果たしたのだ。

仲木の鋭利なアイデアと斬新なデザイン感覚は得意先の信用を得ていたし、神田美術の下請工場と秘密裡に接渉することで印刷進行はとどこおりなく行われた。その上僅かながら単価を引き下げることさえ出来たのだ。

仲木が現在握っているのは東西銀行をはじめ江戸生命保険相互会社、東洋マツトレスなど数社にすぎなかったが、それでもポスター、ダイレクトメートル、カタログ、新聞雑誌の広告などPR

関係の印刷物を受注することで、月々二百万円を前後する売上げを確保するのに成功していた。

仲木の懷中におさめられる純益は、神田美術で得ていたサラリーの十倍に近い。

その代りに可成り多忙であつた。得意先回りのほかに、企画立案から制作、さらに印刷製本発送の進行まで、仲木ひとりで兼任しなければならぬ。それだけでなく、仲木の独立に手を貸したのを恩にきせてか、個人用の挨拶状の印刷から劇場の切符の入手、はては女の斡旋まで、神田美術時代にはなかつた煩雜な仕事まで引き受けなくてはならない。

スタジオに助手をひとり置いてはいたが、現在の得意先が仲木個人の信用でつながり、仲木特有のセンスが珍重されているのだとすれば、容易に代人をたてられぬ事情もあつた。

繁忙をひとりで耐える覚悟はとうにできていた。

摺んだ得意先にあきらめられぬように、PRの直接担当者に適当に甘い汁を汲わせるのを忘れさせなければ、当分は現状を維持していけそうなのだ。

西銀座の司亭という小料理で仲木を待つてゐるのは、東西銀行の高村業務課長なのだ。美保子の機嫌を損ねるのは得策ではなかつたが、やはり高村の接待の方が優先する。高村は仲木の独立を示唆し、最も助力してくれた恩人のひとりだつたのだ。約束の八時を一分でもすぎることは許されない。

仲木が司亭の瀟洒な玄関に車を停めたのは七時四十分すぎであつたが、高村課長はすでにきて